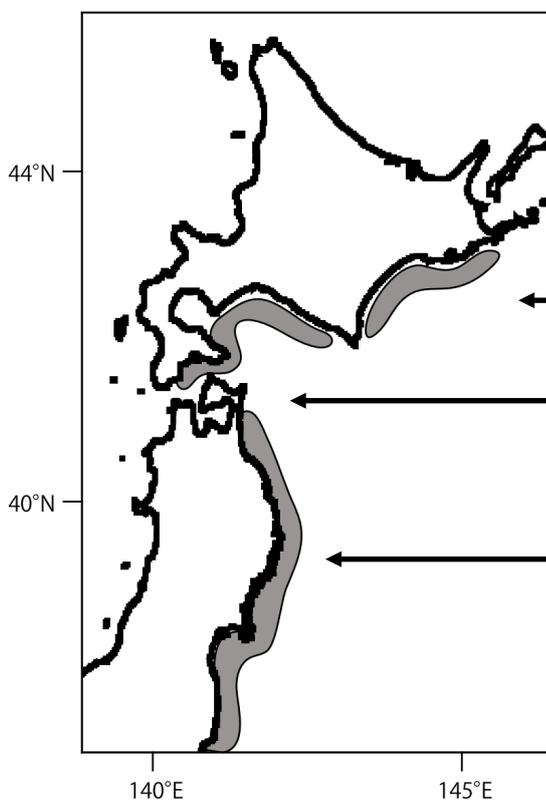




## 2021年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構  
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

### 今後の見通し(2021年8月～9月)のポイント



常磐以北太平洋海域のスルメイカの来遊量は前年を下回る。海域別の来遊量、魚体の大きさは以下の通り。

道東太平洋海域：  
来遊量は前年を下回る。  
魚体は前年より小さい。

津軽海峡～道南太平洋海域：  
来遊量は前年を下回る。  
魚体は前年並。

常磐～三陸海域：  
来遊量は前年を下回る。  
魚体は前年より大きい。

### 問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構  
担当：企画調整部門（横浜） 森永  
浮魚資源部（横浜） 大島、加賀  
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001  
当資料のホームページ掲載先URL  
<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

# 2021年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

## 今後の見通し（2021年8月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2021年級群）

### 1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より大きい。

### 2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

### 3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：来遊時期は前年より遅い。また、漁場形成は散発的で、明瞭な主漁期は無い。
- (3) 魚体：前年より小さい。

## I 予報の説明

2021年5月下旬～7月上旬に実施した太平洋及び日本海のスルメイカ漁場一斉調査と日本海スルメイカ北上期調査<sup>1)</sup>の結果(図1～3;以降、上記調査をいか釣り調査と総称する)、および5～7月までの漁況経過(表1)を主要な情報として8月～9月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域のいずれも前年を下回ると予測される。予報対象期間における前年の漁獲量は常磐～三陸海域では近年5年(2016年～2020年)平均並であるが、それ以外の海域では近年5年平均を下回った。

<sup>1)</sup> 北海道立総合研究機構函館水産試験場が独自に実施。

### 1. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れを主体に、津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが一部含まれると考えられる。三陸周辺海域(41°N以南、143°E以西)におけるいか釣り調査でのCPUE(いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数)は前年を下回った。各地域における6月までの漁法別の水揚げ量や小型いか釣り漁船CPUE(1日1隻当たり漁獲量)は、前年並もしくは前年を下回っていた場合が多かった。6月の定置網漁業による漁獲量は前年を上回ったものの、7月に入ってから前年を下回って推移している<sup>2)</sup>。以上のことから、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年を下回ると予測される。6月中旬～7月上旬に日本海の津軽海峡西口周辺海域(39°N～42°N、138°E～140°E)で実施されたいか釣り調査の結果では前年を下回ったことから、日本海由来の来遊量は前年を下回ると予測される。以上の調査結果、およびこれまでの漁況の経過から、常磐～三陸海域への来遊量は前年を下回ると予測される(前年の漁獲量は近年5年平均並)。魚体サイズは、太平洋でのいか釣り調査結果から、前年より大きい個体が主体になると考えられる。

<sup>2)</sup> 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計

### 2. 津軽海峡～道南太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れと津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが含まれると考えられる。津軽海峡東口周辺海域(41°N以北、143°E以西)におけるいか釣り調査でのCPUEは前年を下回った。6月に函館港に水揚げした小型いか釣り漁船のCPUEは前年を下回った。また、「1.常磐～三陸海域」で記述した通り、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年を下回り、日本海由来の来遊量は前年を下回ると予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される(前年の漁獲量は近年5年平均の漁獲量を下回った)。魚体サイズは、6月の函館港での水揚げ物のサイズは前年並であったこと<sup>2)</sup>、かつ日本海でのいか釣り調査の結果から判断し、前年並の魚体サイズの個体が主体になると考えられる。

### 3. 道東太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合域を北上する群れと考えられる。沖合域(143°E以东)におけるいか釣り調査でのCPUEは前年並であった。一方、有漁点割合は前年を下回った。また、親潮の第1分枝の張り出しは平年並～かなり北偏で推移し(昨年は極めて北偏で推移、2021年度第2回東北海区海況予報<sup>3)</sup>)、道東沿岸域の水温は前年より低くなると予測されている(図4、水産研究・教育機構の海況予測システムFRA-ROMS<sup>4)</sup>)。このことから、前年より道東沿岸域への回遊は遅くなると考えられる。以上のことから、道東太平洋へのスルメイカの来遊量は前年を下回ると予測される(前年の漁獲量は近年5年平均の漁獲量を下回った)。調査CPUEは過去の推移の中でも低い水準にあり、漁場形成は散発的で、明瞭な主漁期はないと予測される。魚体サイズは、沖合域でのいか釣り調査結果から、前年より小さい個体が主体になると考えられる。

<sup>3)</sup> <http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2021/20210618/>

<sup>4)</sup> 国立研究開発法人 水産研究・教育機構により開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム。

## II 調査結果

### 1. 太平洋第1次スルメイカ漁場一斉調査

5月下旬～6月下旬に太平洋で実施されたいか釣り調査の結果、調査海域全体の平均CPUE（いか釣り機1台1時間あたり漁獲尾数）は0.02尾であり、前年（0.03尾）を下回った（図1、2）。有漁点割合も19%で前年の24%を下回った。海域別にみると、三陸周辺海域では0.06尾であり、前年の0.08尾を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域では0.02尾であり、前年の0.06尾を下回った。沖合域では0.02尾であり、前年の0.02尾並であった。

漁獲物の外套背長組成を海域別にみると、三陸周辺海域では最頻値が15cmで前年（11cm）よりも大型であった（図3）。津軽海峡～道南太平洋海域では24cmのものが1尾見られたが、データが少なく前年と比較することができない。沖合域では最頻値が13cmにあり、前年（14cm）より小型であった。

### 2. 日本海スルメイカ漁場一斉調査（2021年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報の結果より引用・改編）

6月中旬～7月上旬に津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）で実施されたいか釣り調査の結果、平均CPUEは0.2尾であり、前年（2.8尾）を下回った。外套背長組成は最頻値15cmの単峰型で、前年（13cmと16cmが高頻度の二峰型）と比較して、平均値としては同程度であった。

### 3. 移行域幼稚魚調査（参考情報として掲載）

5月上旬～6月上旬に常磐～三陸沖の太平洋で実施された表層トロールネットによる調査の結果、外套背長10cm未満のスルメイカの平均CPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）は5.6尾で、前年（41.8尾）を下回った（図5）。また、全調査点のうち有漁点の割合は59%であり、前年（92%）を下回った。漁獲物の外套背長組成は2～5cmと8cm付近がやや高い幅広な組成で、前年（1cm）より大型であった（図6）。本調査で採集された群れは、本予報期間後半に漁場へ来遊する可能性があるが、CPUEは前年を下回っており（前年比13%）、漁場への来遊の寄与としては大きくないと考えられる。

## III 各海域の漁況経過

2007年～2015年の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量<sup>1)</sup>は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2018年には1.7万トンまで減少した（図7）。2019年は僅かに増加し、2.2万トンとなり、2020年も同じく2.2万トンであった。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域および道東太平洋海域に区分される。太平洋海域での2020年8月～9月の漁獲量（生鮮）は7.5千トンであり、そのうち常磐～三陸海域では6.2千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では0.7千トン、道東太平洋海域では0.3千トンであった（図8）。近年5年（2016年～2020年）平均比は、常磐～三陸海域では91%、津軽海峡～道南太平洋海域では46%、道東太平洋海域では47%であった。なお、根室海峡～オホーツク海と千葉県以南の海域の漁獲量はそれぞれ0.3千トンと0.1千トンであった。

2021年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量<sup>2)</sup>（生鮮：速報値、一部未集計）は185トンで、前年（528トン）を下回った。常磐～三陸海域の主要港では126トンで、前年（305トン）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では17トンで、前年（99トン）を下回った。千葉県以南では43トンで、前年（123トン）を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

<sup>1)</sup> 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図7、図8を含めた漁獲量は全て推定値である。

<sup>2)</sup> 水揚げ量は単純積み上げた数値。

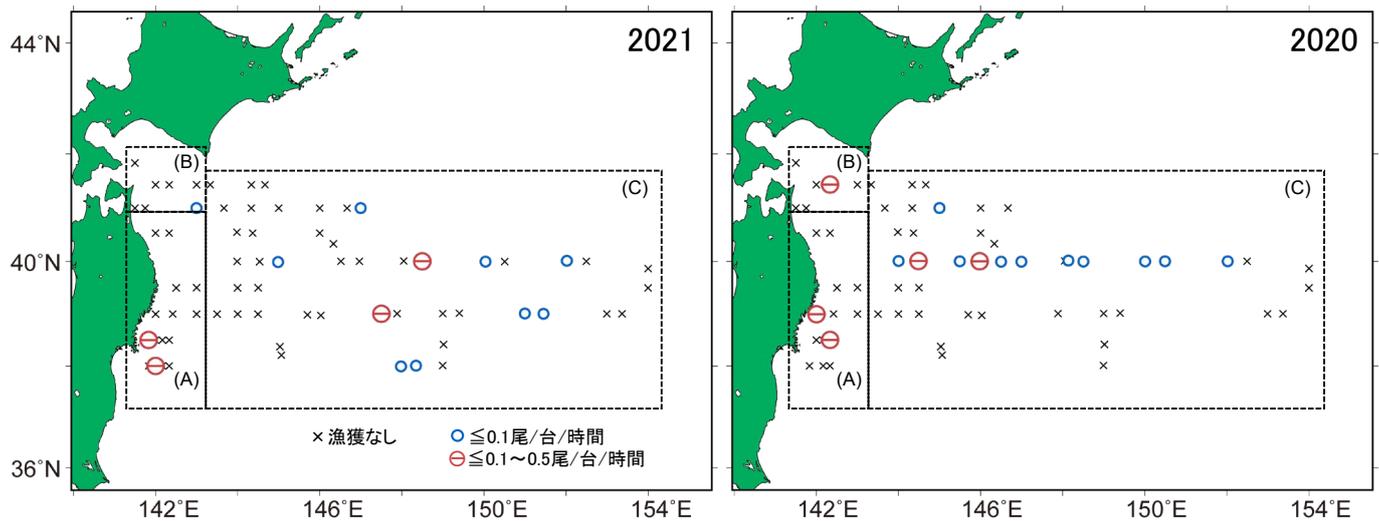


図1. 2020年、2021年5月下旬～6月下旬の太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

●は0.1～0.5尾/台/時間、○は0.1尾/台/時間以下の有漁点、×は漁獲なしを表す。破線で囲まれた海域は（A）三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）沖合域を示す

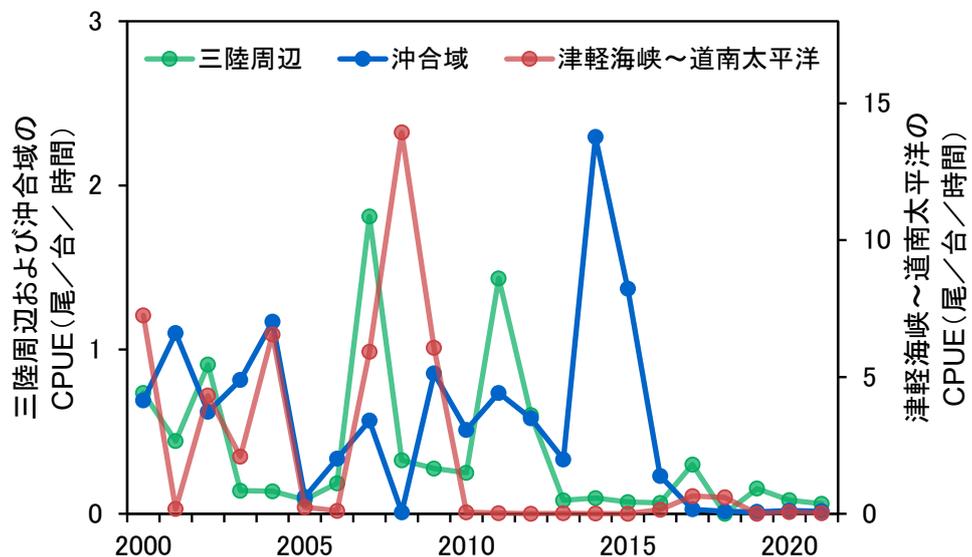


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

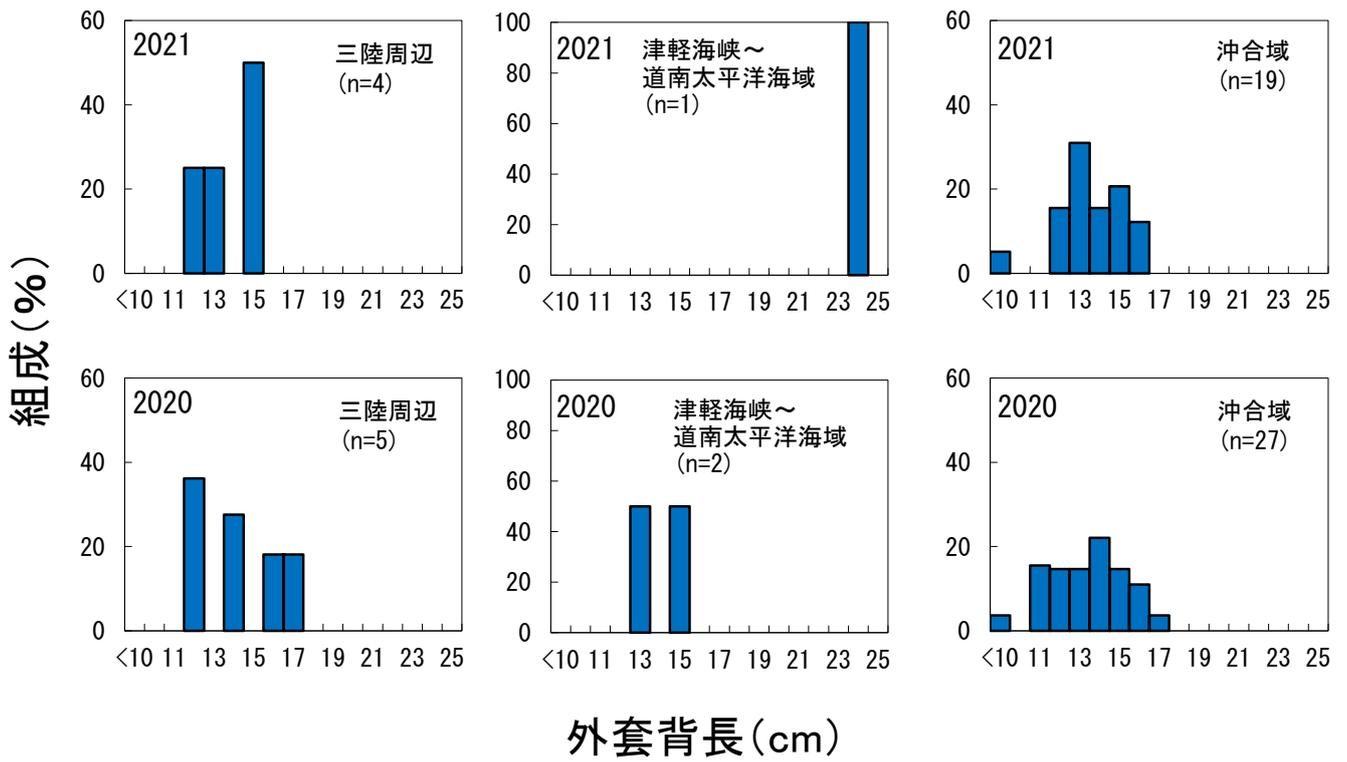


図3. 太平洋におけるいか釣り調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋海域・沖合域）で採集されたスルメイカの外套背長組成  
 各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している  
 nは測定尾数を示す

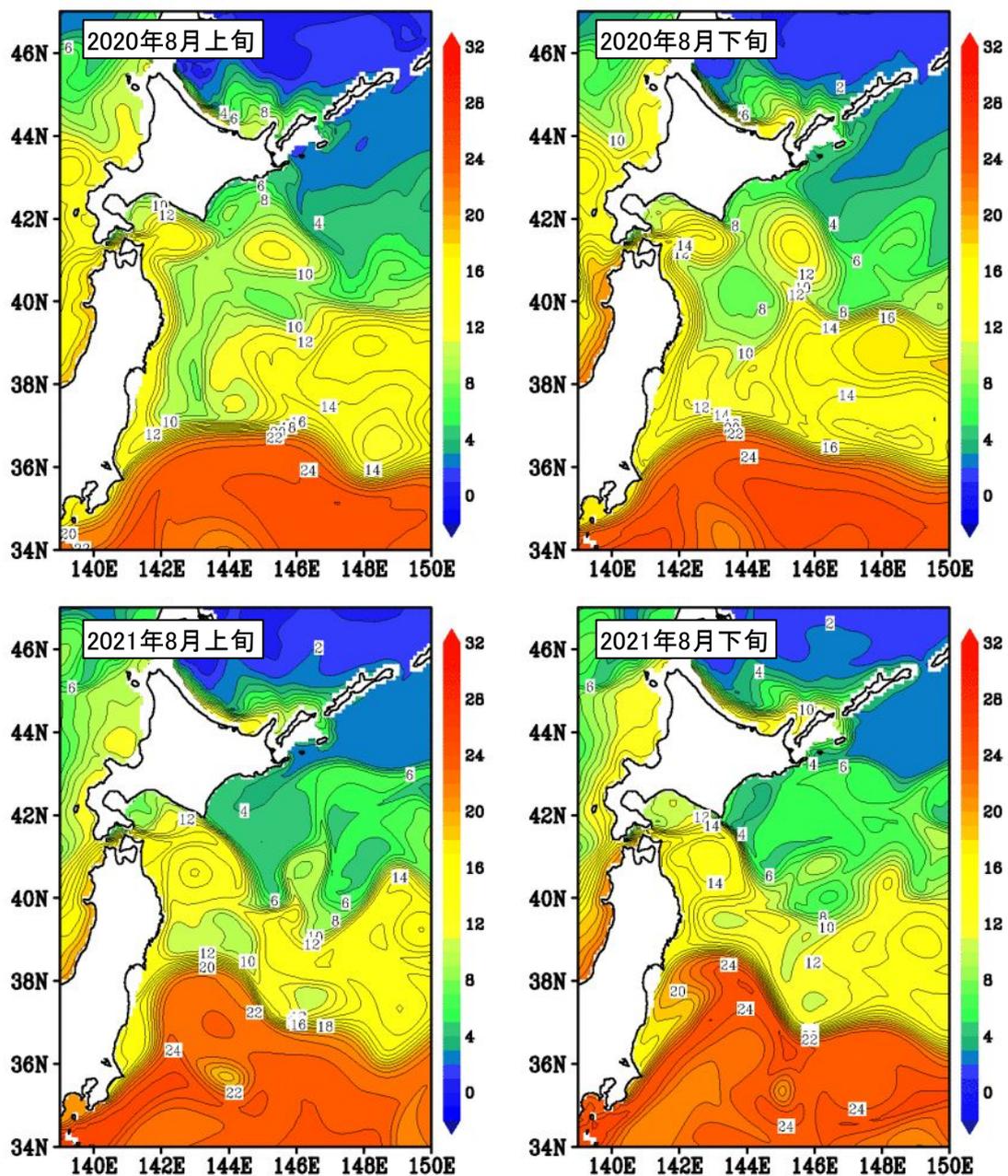


図4. 海況予測システムFRA-ROMSによる2020年、2021年の8月上旬と下旬の深度50mにおける水温（2021年は予測水温）  
 深度50mはスルメイカの代表的な分布深度

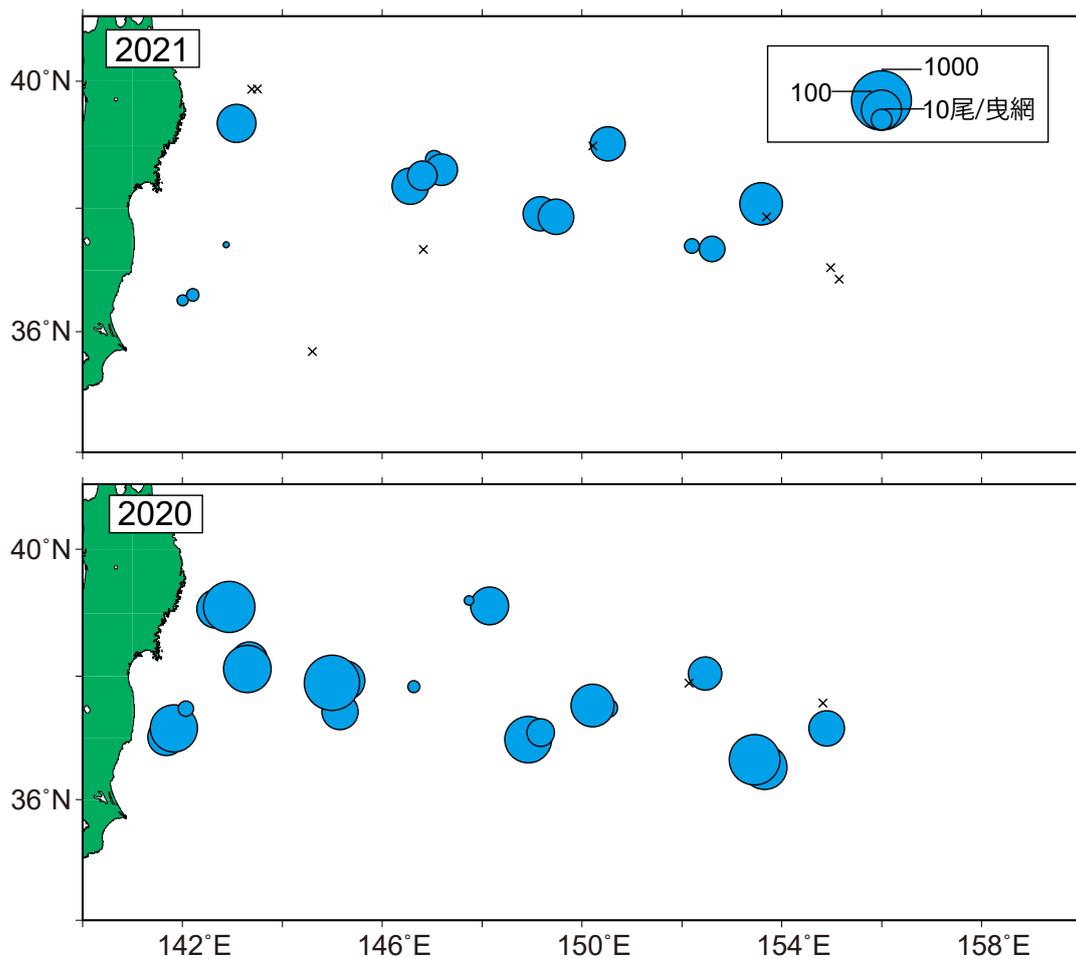


図5. 2020年、2021年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査によるスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布  
 ×は漁獲が無かった点を示す

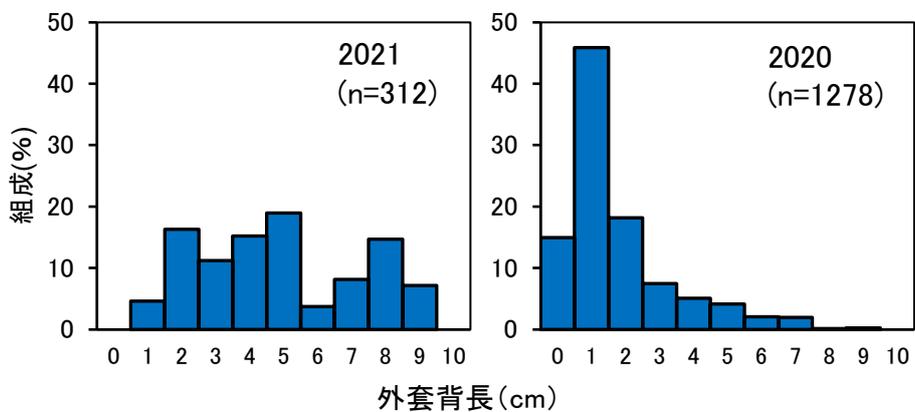


図6. 2020年、2021年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査で採集されたスルメイカの外套背長組成

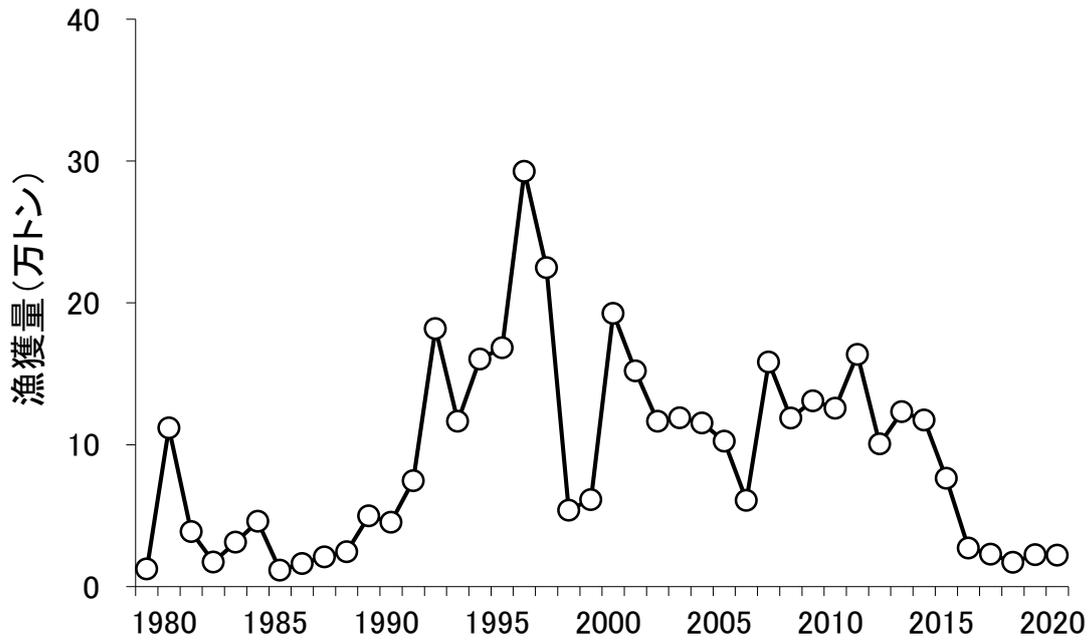


図7. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの漁獲量（全漁業の暦年集計）の年推移

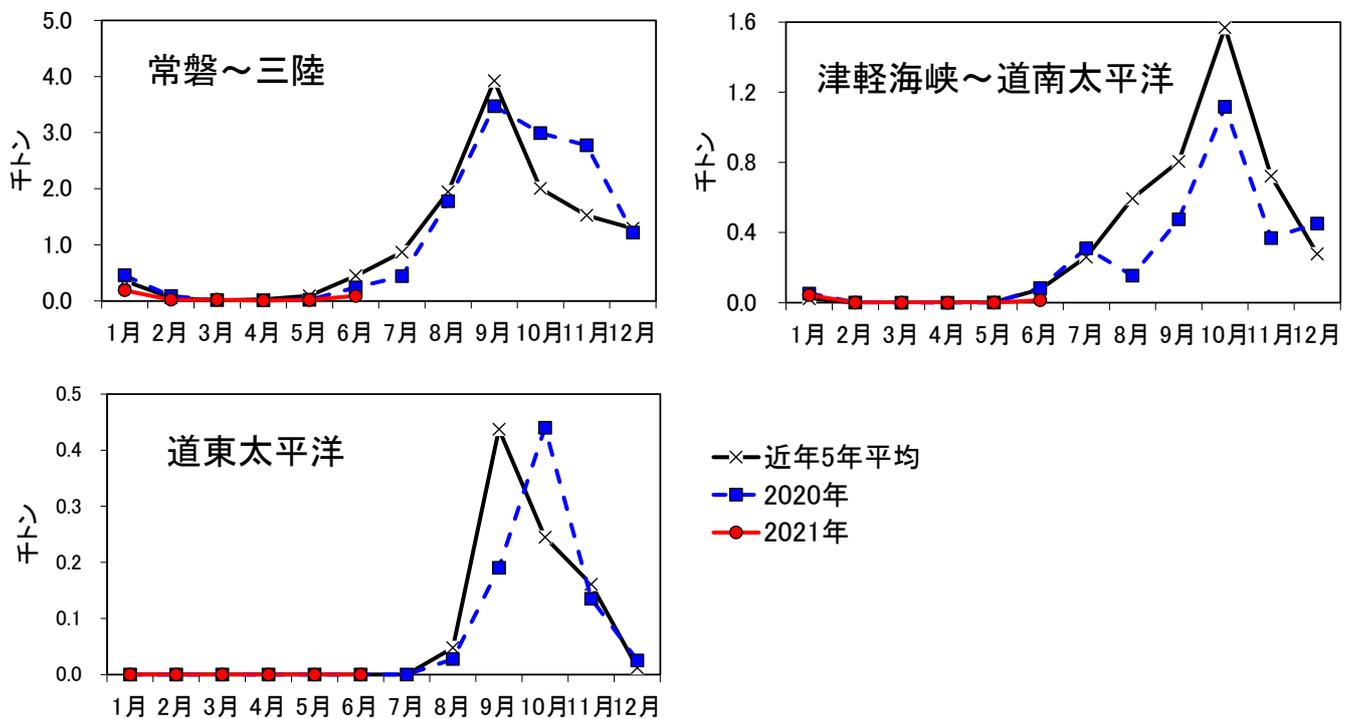


図8. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）  
 近年5年平均は2016年～2020年の平均  
 （釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過（2021年5月～7月、一部未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	7月28日の時点で初水揚げはまだない（前年は厚岸で8月10日に初水揚げがあった）。
北海道 道南	6月の函館港への釣りによる水揚げ量は13トン（前年比40%）であった。CPUEは前年比45%であった。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は1トン（前年比39%）、CPUEは前年比45%であった。6月の八戸港への釣りによる水揚げはなかった（前年は45 kg）。6月の大畑港への釣りによる水揚げはなかった（前年は0.6トン）。八戸港への底びき網による6月の水揚げ量は20トン（前年比64%）であった。
岩手	6月の主要7港への釣りによる水揚げ量は1.8トンで前年（0.2トン）を上回ったが、CPUEは前年並（前年比84%）であった。底びき網による水揚げ量は0.2トン（前年比6%）で、定置網による水揚げ量は16.6トンで前年を上回った（前年比171%）。漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報では、7月に入ってから定置網の漁獲量は前年を下回って推移している。
宮城	6月の主要10港への底びき網による水揚げ量は23トン（前年比13%）であった。定置網による水揚げ量は20トン（前年比413%）であった。釣りによる水揚げ量は0.03トンであった（前年は無し）。
福島	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚げ量は3.9トンであった（前年比243%）。
茨城	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚げ量は1.3トン（前年比26%）、小型底びき網による水揚げ量は1トン（前年比29%）であった。
千葉	5月～6月の主要3港への定置網による水揚げ量は3.2トン（前年比66%）、釣りによる水揚げはなかった（前年は7kg）。
神奈川	5月～6月の主要2港への定置網による水揚げ量は0.3トン（前年比202%）であった。6月の間口港への釣りによる水揚げ量は368 kg（前年比542%）、CPUEは前年比391%であった。
静岡	6月の仁科浜港への釣りによる水揚げ量は0.1トン（前年比4%）であった。CPUEは前年比19%であった。
三重	5月～6月の奈屋浦港への中型まき網による水揚げ量は2トン（前年比3%）であった。5月の主要2港への定置網による水揚げ量は0.7トン（前年比30%）であった。和具港への釣りによる水揚げはなかった（前年もなし）。
和歌山	6月のすさみ港への釣りによる水揚げ量は4トン（前年比249%）、CPUEは前年比99%であった。
高知	5月～6月の主要3港への釣りによる水揚げはなかった（前年もなし）。

注：CPUEは1日1隻当たりの漁獲量

## 参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	静岡県水産・海洋技術研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	三重県水産研究所
岩手県水産技術センター	和歌山県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産資源研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関)
千葉県水産総合研究センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
神奈川県水産技術センター	